

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-11

4連休の初日に深夜まで辰巳と『ホテルオークラ』で過ごした真紀は、その日の夕方にかかってきた麻里子からの携帯電話で、これまでの大まかな経緯の報告を受けた。

自分の依頼事がとんとん拍子で進んでいることは申し分なかったが、ホテルの同じ部屋に泊まる現況まで、ありのままに告白されると、大人同士の分別とは言え、真紀は少なからず抵抗感を持った。

酸いも甘いも噛み分ける真紀の経験則からしても、辰巳と麻里子がいきなり男女関係を持つことなど意想外だった。

責任を強く感じた真紀は、明朝、始発の新幹線で長野まで行こうと焦ったりもしたが、ふたりからの連絡を待つほうが賢明だと思うことにした。

昼過ぎに辰巳から真紀に、今、嵐山カントリークラブでプレイをしているとの電話があった。

折り入って相談したいことがあるから、ホテルオークラで夕食でもどうかと言われた。

真紀にしてみれば願ってもない誘いだったので、嵐山カントリークラブは自分もコンペに参加したことがある話から、プレイしやすいコースでしようかと調子を合わせることで、相手の機嫌を損ねないように夕食は断って、8時にメンバーで会う約束をした。

約束の時間より早めにホテルの5階にあるオーキッドバーに行った真紀は、出迎えた黒服にその旨を伝えて奥のボックス席に案内してもらった。

真紀は程よい会話のささめきの中で、断続的に氷がグラスに当たる音やリズムカルに振られるシェーカーの音を耳にしながら辰巳を待っていた。

聞きたいことの要点を脳内で復誦していた真紀は、大柄な辰巳が間近にくるまで、ついぼんやりして気づかないでいた。

辰巳は立ち上がろうとした真紀を制して対座した。

「2日ぶりの再会だね！」と辰巳は（こんばんは）もなく照れ隠しに冗談を言って、自嘲めいた笑いを浮かべた。

「お疲れになったでしょう。今日はいくつで回られました？」と真紀は本題に入る糸口になればと思いやって訊いた。

「グロスで86。ドライバーはそこそこだけど、アイアンとパターに手こずったね」と辰巳はどこかよそよそしく答えた。

程よいタイミングで、ウェ이터がオーダーをとりにきた。

「スティンガーをお願いします」と真紀が頼むと、「何なのそれは？」と辰巳が訊き返えしてくるので、「ブランデーベースのカクテルです」と真紀は説明した。「ふーんそうなんだ。私はロブ・ロイをオンザロックで」と辰巳は意味深な含み笑いをして頼んだ。